
村上

むらかみ

ミキ

みき

未来を子どもたちにも託して

たく

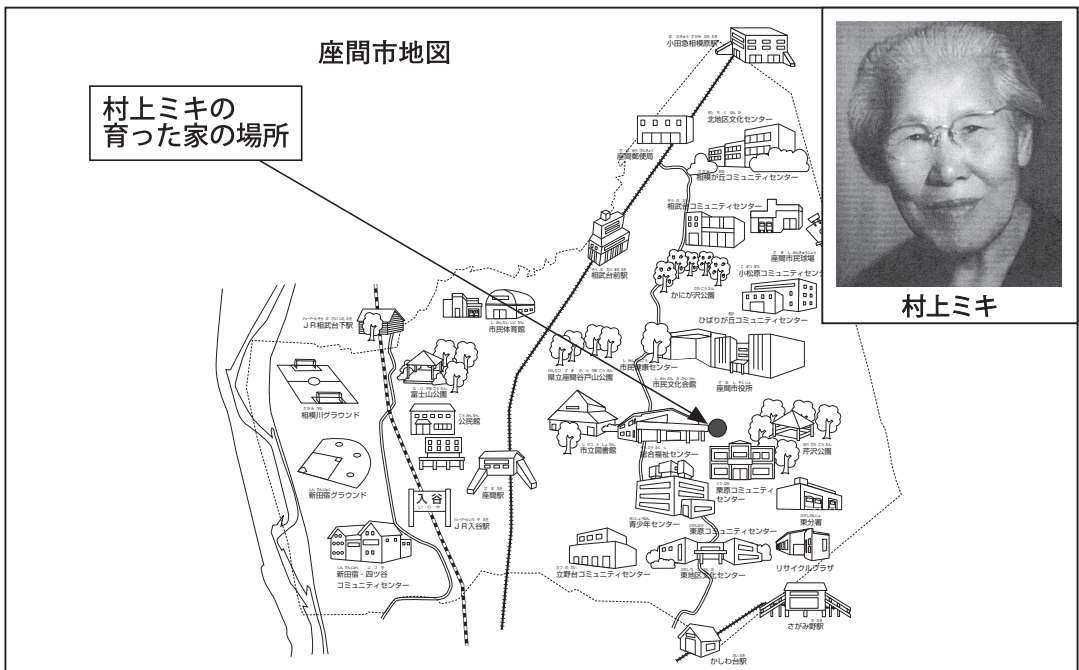
文・絵

小野田

おのだ

順子

じゅんこ



西暦	和暦	できごと	時代背景
一八七八年	明治十一年	神奈川県に生まれる。	
一九〇二年頃	明治三五年頃	二十四歳で村上初蔵と結婚する。長男が誕生する。	
一九一八年	大正七年	四十歳、息子を連れ、渡米する。	
一九二三年	大正十二年	長女が誕生する。	一九四一年 太平洋戦争
一九五一年	昭和二六年	七十三歳、日本に一時帰国する。	一九五一年 サンフランシスコ 講和条約調印
一九五五年	昭和三〇年	十一月十四日、七十六歳でアメリカにて亡くなる。	

【文・絵 作者紹介】

小野田順子は座間市の元教育委員で、今回、文章の執筆と挿絵を担当した。戦前・戦後の資料を、座間市生涯学習課長、浅野寛の協力を得て、調査研究し、原稿を執筆した。

栗原小学校のランチルームに、一台の古いグランドピアノが置かれています。ペンキがはがれ、鍵盤は所々で無くなっていて、音はそろっていません。こんな壊れたピアノがなぜここにあるのでしょうか。調べてみると、栗原小学校の前身の座間第二小学校が開校して間もない昭和二十六年、一人の老婦人が、座間の栗原を訪れていることが分かりました。その人が村上ミキ、このお話の主人公です。



栗原小学校ランチルームのグランドピアノ

ミキ、アメリカへ

村上ミキは明治十一年（1878年）に生まれ、座間の栗原で育ちました。

座間では幕末から、地域の裕福な農家が資金を出して、若者たちに学問などを教える郷学校（きょうがっこう）ができていました。その郷学校が明治十年には栗原学校となり、昭和二十五年に座間第二小学校、さらには昭和四十八年、栗原小学校となったのです。ミキもこの栗原学校に通ったことでしょう。

郷学校
幕末に日本各地にあった、青年たちの民間教育施設。座間では大矢弥市らが知識人を招き「誠志館」とよばれる学校を作った。

栗原学校
郷学校から、ときを経て栗原学校となった。その後座間第二小学校として現在の栗原小学校となった。

ミキは明治三十五年（1902年）頃、京都出身の村上初蔵と結婚し、ほ
なく息子が生まれます。当時は海外移住が盛んで、初蔵も明治三十六年（19
03年）に単身アメリカに渡りました。始めにカリフォルニア州に入ったのち、

明治四十二年（1909年）にはユタ州で農場経営に従事します。ほどなく州
都ソルトレークでホテル業を始め、やがて市の大通りに面した場所で大きな「イ
ンペリアルホテル」を経営するようになりました。このホテルは部屋数三十五、

プール付きという立派なものでした。そしてミ
キも、大正七年（1918年）、息子を連れて初
蔵のもとへ渡ります。やがて娘も生まれ、家族
四人の暮らしが始まりました。

当時のアメリカ社会ではまだ民族による偏見
や迫害が頻繁に起こっていましたが、村上夫妻
の誠実で勤勉な人柄が信用を築き、商売は繁盛



インペリアルホテル



カリフォルニア州
ユタ州・ソルトレーク

偏見
偏った見方、考え方。
迫害
弱い立場の者などを追いつめて、苦しめること。

しました。一時は三つのホテルを経営していたこともあったようです。日本人移民の心のよりどころとして寺院が建てられたときには、多額の寄付をしました。

日米戦争のはざままで

しかし昭和十六年（1941年）、夫の初蔵が日本に一時帰国しているときに、

日本とアメリカの間で戦争が始まりました。アメリカ政府は日本人を排斥し、

特に西海岸では、日本国籍を捨てるか収容所に入るかの決断を迫られました。

内陸部のソルトレークでは日本人に対する感情は比較的小おらかではあったの

ですが、それでもホテル経営は悪化し、ミキは従業員と一緒にシーツを洗い、

石炭運びまでしました。そんな中でも、ミキたちは、不安な思いで西海岸から逃れてきた多くの日本人移民をあたたかく迎えました。

一方で、日本に帰国していた初蔵は、終戦後もすぐにはアメリカの家族の元

日本人移民（日系移民）
1885年から1924
年ごろ多くの日本人がア
メリカへ向かった。明治
維新での改革の後、貧し
い人々は生きていくため
仕事を求めてアメリカに
渡った。

排斥
受け入れられないものを、
押しつけ、しりぞけるこ
と。

西海岸
ワシントン・オレゴン・
カリフォルニア・アリゾ
ナの四州。

収容所
戦争時に政府が敵性外国
人等を強制的に収容する
ための施設。ユタ州にも
作られ8000人余の日
系人が送られてきた。

にもと戻れませんでした。そして残念なことに、昭和二十三年（1948年）に京都で事故により亡なくなってしまったのです。

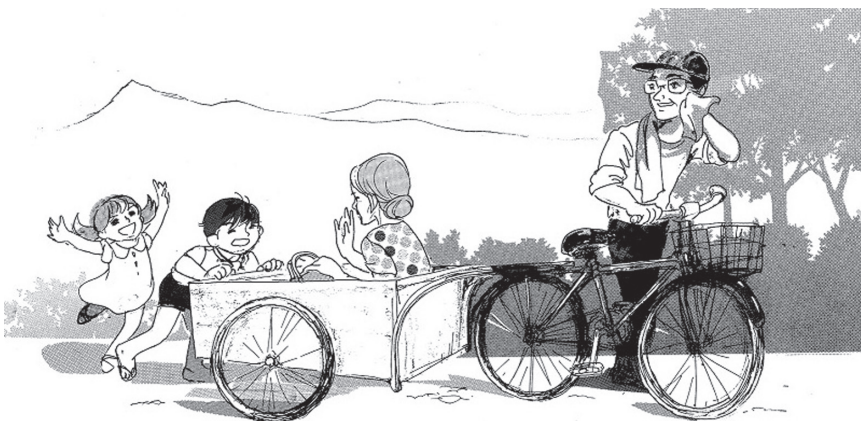
アメリカおばさん帰る

昭和二十六年（1951年）六月、ミキは三十数年ぶりに日本に帰国します。

亡くなった夫・初蔵くようの供養のために京都へ行き、自らの故郷・座間こきようを訪れるためです。ミキは七十三歳。ハイヒールを履はいて、羽田飛行場からタクシーで座間まで来たミキのことを、滞たいざい在先いさきの親戚しんせきの娘さんたちも「アメリカおばさん」としてよく憶おぼえていました。歯磨はみがき粉こや塩しほで歯を磨くのが普通だった当時、ミキが持ってきた歯磨きチューブが珍めずらしかったといっています。

ミキはリヤカーに乗っかり、座間の親戚しんせきや友人の間を回りました。

そのころ、座間第二小学校（後の栗原小学校）は前年に開校したばかりで、いろいろな設せつ備びが不足していました。



一つはピアノです。PTAが資金集めをしていましたが、たいへん高額でこうがく購入するにはとうてい足りませんでした。

そしてもう一つは図書でした。戦後の新しい教育が進むなか、読書の大切さがと説かれていましたが、座間第二小学校には図書室がありませんでした。先生方の努力で何とか場所は作ったものの肝心の本が足りず、PTAや地域の方々の寄付を募るだけでなく、子どもたちもお茶の実を集めていました。油の原料としてこれを売り、図書購入の資金にしようとしたのです。

投げ出した一千ドル

小学生奨学資金に滞米35年の老婆が

滞米三十五年に及ぶ一老婆が今生の想い出と祖先伝説のため欠乏ぶりで帰国したのを機会に、郷里の小学校児童へ奨学資金のたしと米貸し(田代貸、三十六万円)を示しと貸出し譲利を目前に控えた隣村に明るい話題をなけていた。話題の人は高座郡座間町栗原字字次山身村上ミキさん(70歳)で、大正七年座間初造さんと伴われて

梅米に際し賣い残りの千(邦貨三十六万円)を次代を担う小学生の奨学資金にと町役場へ寄付した

神奈川新聞の記事 (昭和 26.9.3)

ミキはそんな故郷の様子を察し、アメリカに帰る折に「子どもたちの奨学資金の足しに」と座間町に多額の寄付をしてくれました。千ドルというその金額は当時の日本では大変なお金でした。

その年の十月、立派なグラランドピアノが、

お茶の実拾い
栗原小創立五十周年誌
「はたくも」より

図書館増冊のために、児童も協力してお茶の実拾いをしました。家の周りに植えてあるお茶の木の下にもぐって、一粒でも多くの実をと集めました。お茶の実が、油の原料として売れたのです。学校には大きな木の箱があり、その中にジャーと開けた快音が今も思い出されます。自分も役立っているという満足感がありました。

千ドル
日本円にする約36万円
(現在の約1040万円)。

座間第二小学校にやってきました。童謡歌手が呼ばれ、はなばな華々しいお披露目会がひろめ行われて、地域全体で喜びました。

また、昭和三十年（1955年）までの四年間で、三百八十冊もの本が町内の学校に贈られ、「村上図書」として座間の子どもたちに読書の楽しさを教えてくれました。

海の向こうからのお年玉

昭和二十六年の暮れ近く、アメリカに帰ったミキからキャンディやガムが送られてきて、座間第一小学校、座間第二小学校の全ての子どもに突然の「お年玉」として配られました。子どもたちが感謝の手紙を送ると、ミキも大変喜んで、毎年末に「クリスマスプレゼント」として五十ドルを送ってくれるようになりました。町ではこの五十ドルでキャラメルやノートを買い、「村上さんからのお年玉」として一月一日の元旦式がんとんしきに小学生と中学生に手渡しました。

お披露目会
座間広報の昭和26年11月10日の記事に書かれている。

町内の学校
当時は座間第一小学校（現在の座間小）・座間第二小学校（現在の栗原小）・座間中学校の三校。
生徒数は：約1900名。

元旦式 次第
【座間第一小学校の日記から】

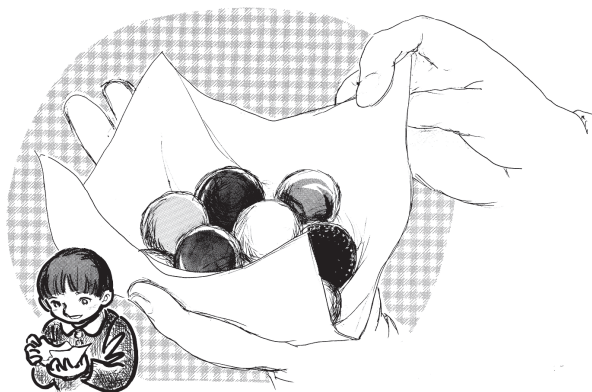
- 一 開会の言葉
- 二 国歌
- 三 校長先生のお話
- 四 校歌
- 五 お年玉 村上さんより

この「お年玉」はミキが亡くなるまで続けられました。

まだまだ物が不足していた時代で子どもたちは配られたお菓子や文房具に大喜びしました。そのころ小学生だった人たちの多くは、このお年玉のことをよく覚えていきます。

「大きな飴玉の赤や緑や紫の鮮やかな色が、今でも目に浮かびます。アメリカってどんなところだろうと想像しました。」

「ノートは宝物でした。大切に、大切に、使ったものです。今でも持っています。」

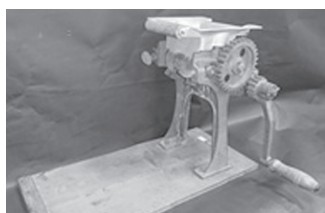


当時町の収入役だった澤田覚さわただかくさんの家に、ミキと交かわした手紙が残っています。ソルトレークからの手紙には、座間の子どもたちが大喜びしたあのキャンディを「送った」と書かれたものもあります。ミキの息子や娘が代筆だいひつした手紙

お年玉として贈られたノート



製麵機
うどんなどの麺類をつくる機械。



収入役
市町村の役所で事務をまとめる特別な職。現在の市役所では廃止されている。

がいくつもあり、だんだん体が弱っていきながらも、ミキが座間からの便りを喜んでいた様子が伝えられています。

澤田家には、座間から感謝の手紙を送ったときの覚書なども残っ

ていました。送った鮎あゆの干物ひものから甘露煮かんろにを作る方法を書いたものも

あります。当時、座間の家庭でよく使われていた製麺機せいめんきも送られて

いました。娘のヒサエ（メアリー・ドイ）が経営していた食堂のメ

ニューにも「UDON」（うどん）とあって、ふるさとの味をみんな

で楽しんだと思われます。

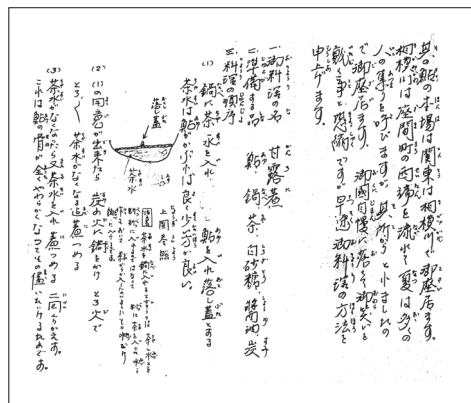
さようなら — それでもピアノは残った—

昭和三十年（1955年）の晩秋、ミキがソルトレークの自宅で

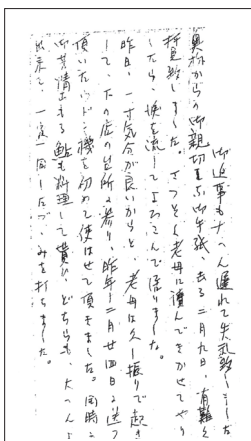
十一月四日に亡くなったと電報が届きました。七十六歳でした。

町では、ミキが故郷の座間を愛し忘れなかったこと、そこで育つ

製麺機は前ページを参照



澤田覚さんからミキへの手紙



ミキの息子の好男から澤田覚さんへの手紙

子どもたちを気にかけて寄付をし、さらにお年玉を送り続けていたことに感謝す

ちようじ

る弔辞を遺族に届けました。告別式で座間町からの弔辞が読み上げられると、

初めてミキが故郷の子どもたちを長く支援しえんしていたことが明らかになりました。

「まれにみる徳行とっこうの人」と現地の新聞が取り上げ、ミキを偲しのびました。

時は流れ、座間町は昭和四十六年（1971年）には座間市と変わり、その後も人口増加に合わせて次々と学校が作られました。第二小学校も昭和四十八年（1973年）に栗原小学校となりました。あのグランドピアノも次第に古くなっていき、やがて壊れて使われなくなりました。何度も捨てられそうになりましたが、そのたびに「あれは大切なピアノなんだ」という声が上がり、ピアノは栗原小学校に残り続けました。本当のところ、ピアノの由来ゆらいを知る人はもう学校にはいなくなっていたのですが、「大切にしなければならぬ」という思いだけは消えずにいたのです。

弔辞
葬式などで、亡くなった人に向けて、読まれる悲しみの気持ちを表すことば。

現地の新聞
在米する日本人のための新聞。
ここでは「ユタ日報」のこと。

徳行
道徳的な良い行い。

由来
物事の始まりや、たどってきた経過。

時を越えた再会

「郷土の先人たちに学ぶ」の一環として「村上ミキ」の執筆が進んでいた平

成二十七年、偶然にもアメリカで村上家と親しくし

ていたサワダ家の方から連絡がありました。ミキの

子孫たちが、自分たちのルーツを知るために来日し、

座間に寄って祖母であるミキについて話を聞きたい

というのです。



ロビンを抱くミキ

八月、サワダさん父娘の案内で、ミキの孫（娘メ

アリー・ヒサエ・ドイの長男）にあたるロビン・ド

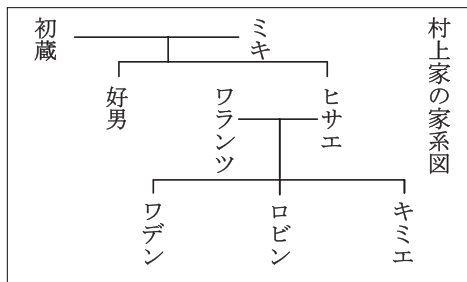
イが、四人の家族と一緒に座間市を訪れました。ロビンたちは、座間の人々が

祖母に深く感謝していることを知り、大変喜びました。ミキの「お年玉」を実

際にもらった人とも会って、固く手を握り合いました。ミキの善意と故郷への

思いが時を越えてよみがえり、故郷の人々の感謝の心とつながったのです。

サワダ家
戦時中、村上家とアメリカのソルトレークで親戚同様の親密な親交があった。親子三代にわたり現在も付き合いが続いている。



【参考・引用文献】

大谷之彦「徳行の人村上ミキさん」戦後直ぐアメリカから故郷座間の子どもたちに

プレゼントを送り続けた人から」座間市教育研究所報第79、80号

栗原小学校創立五十周年記念誌「はたぐも」

座間市教育研究所 座間市教育資料 第七集「座間小学校日誌抄」

澤田覚家資料

JICA 横浜 海外移住資料館資料

綾部市資料館資料

神奈川新聞 昭和二十六年九月三日 紙面

松本市中央図書館内資料「ユタ日報」(復刻版)

移民関係資料 <http://abish.byui.edu/specialCollections/fhc/Japan>

ユタ大学図書館資料 (インペリアルホテル・日系移民写真)